

香りの世界の共感覚比喻

山田 仁子

1. はじめに

町を歩いていてふと何かの香りが鼻孔をくすぐる時、人はどう反応するだろうか。多くの人には、「あ、沈丁花でも咲いているのかな」とか、「うなぎ屋が近くにあるのかな」と、「香りを発する物が何なのか」をまず無意識に探り当てようとするのではないだろうか。

香り、あるいは匂いは、その刺激を発する物と結びつけられることが多い。匂いを嗅げばその匂いを発する物が想起される。自分の嗅いだ匂いを他人に説明するにも、匂いを発する物の名を指し示すと、効率よく相手に伝えることができる。

さまざまな匂いを生き生きと感じさせるパトリック・ジュースキントの小説『香水』も、匂いが発する物を示し、更には匂いを発する物の状況を精密に描写することで、匂いを読者に伝えている。例えばこの小説の舞台である18世紀のフランスの町の悪臭に満ちた様子は、次のように描写される。

- (1) 通りはゴミだらけ、中庭には小便の臭いがした。階段部屋は木が腐りかけ、鼠の糞がうずたかくつもっていた。台所では腐った野菜と羊の油の臭いがした。風通しの悪い部屋は埃っぽく、カビくさかった。寝室のシーツは汗にまみれ、ベッドはしめっていた。

(Süskind, pp. 8-9)

「小便」「腐りかけの木」「鼠の糞」「腐った野菜」「羊の油」「埃」「カビ」「汗」「しめったベッド」と、匂いを発する物とその状況を次々に数え上げることにより、匂いに満ちた世界を描き出している。

匂いそのものの性質を、物との結びつきなじに表現するのは、容易なことではない。「におい」を研究するある科学者はこう言う。

- (2) 桜の花の香りはどんな香りですかと質問されても答えようがありません。そこで、 β -フェニルエチルアルコールとクマリン（桜餅の香り）とが混ざった香りだと答えてい

ます。においては言葉で説明することが非常に困難なのです。ですから成分名で答えざるを得ません。
(荘司, p. 8)

(2)では匂いをその成分にまで分解してはいるが、成分もまた物であり、ここでも結局は匂いを、それを発する物の名で説明していることに変わりはない。もっともこの場合、成分名を挙げられても化学の知識がない者にはその匂いは理解のしようがなく、その一成分の匂いが「桜餅」に似たものであるという、再び物の名に頼る説明により、わずかに類推するだけである。

匂いの質を物との結びつきなしに表現することができるはずの、嗅覚における感覚経験を直接表す語彙は、実に数少ない。英語、日本語においては次の(3)(4)に挙げたわずかなものくらいである。英語の“pungent”は嗅覚経験を表すが、語源的には「突き刺す」という意味の本来触覚経験を表す語彙であるため、ここでは省いた。嗅覚の領域に属するわずかな語彙は、更に、匂いの質を限定することはほとんどない。「わるい匂い」「いい匂い」程度の内容しか伝わらない。具体的な匂いの質はこうした語彙だけでは分からないままである。

(3) fragrant

(4) くさい、かぐわしい、かんばしい、ふくいくとした

匂いの質を限定して表現するために残された方法は「比喩」である。香水ガイドブックを書いたルカ・トゥリンという人物は、その作業が「匂いを比喩へと置き換える」ことだったと言う。

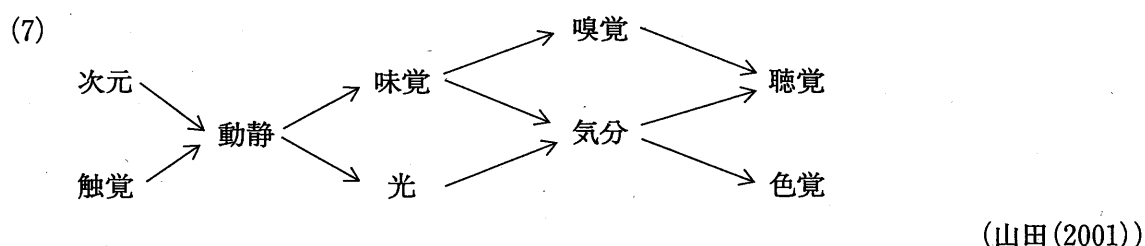
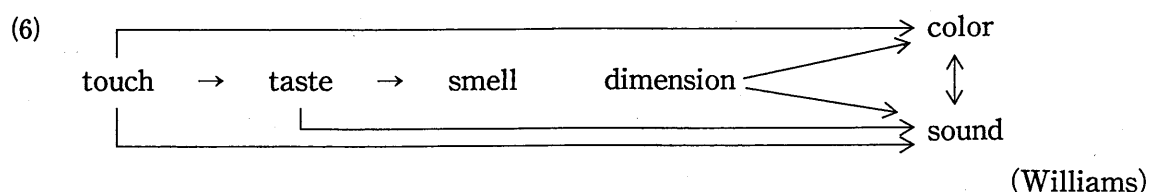
(5) ... I had written a perfume guide, I'd written smells into the metaphors of language
...
(Burr, p. 304)

香水に興味を持つ人たちに対して、嗅いだことのない香りの質を伝える必要のある香水の世界では、香水の香りの魅力、特質を伝えるために、豊かな比喩が用いられる。本稿では、香水のカタログなどを主な資料に、香りを表す豊かな比喩の世界を探っていきたい。なお、以下に扱う資料は英語の文献より収集した。

2. 嗅覚経験を表す共感覚比喩表現

一つの感覚領域における経験を他の感覚領域に属する語彙で表す表現を共感覚比喩表現という。Ullmann (1959) や Williams (1976) をはじめとする共感覚比喩表現の研究でも、本来他の感覚領域に属する語彙（特に形容詞）が嗅覚による経験を表すことは指摘されてきた。次の図(6)に示すように、Williams では「味覚」の語彙が「嗅覚」経験を表すと論じられた。また山田 (1992) (1993) (1994) は共感覚比喩表現を分析することにより、言語レベルの感覚が「五

感」と言われる5種にとどまらないことを論じ、山田(2001)では、次の図(7)が示すように、「味覚」に加え、「触覚」と、「次元」と「動静」という感覚領域の語彙が「嗅覚」経験を表すとまとめた。



本稿では以下、これまでに嗅覚経験を表すと指摘された感覚「触覚」「味覚」「次元」「動静」に加え、「光」「聴覚」「色覚」の語彙による嗅覚経験の表現も検討していく。(7)の図に含まれる「気分」については、今回調査した資料では、ほんのわずかな特殊なものだけしか見いだされなかった。「気分」を表す語彙により嗅覚経験を表すことは困難であるのかもしれないが、わずかな例はその可能性を示すものとも考えられる。この領域については、また機会を改めて検討したい。今回以下に検討する感覚の順序は(7)の図の左に登場するものからとする。また、共感覚に関する研究には形容詞のみを扱うものも多いが、本稿では形容詞に限らず、幅広く用例を集め検討していきたい。

3. 触覚からの共感覚比喻

“harsh” “sharp” “soft” “hot” “heavy” “light” といった形容詞は本来「触覚」の領域に属する語彙でありながら、嗅覚経験を表す“smell”という名詞に結び付けて用いることができる。「触覚」から「嗅覚」への共感覚比喻は山梨や山田で論じられている。

香水に関する文献では、上の形容詞の他にも「触覚」の語彙が嗅覚経験を表す例が多く見られる。「触覚」の中でも特に「手触り」を表す語彙が用いられる例を、以下に下線を施して示した。(8)-(11)の“harsh” “rough” “soft” “smooth” “mellow” “sticky” “sharp” といった基本的な形容詞の他に、(9)(12)の“velvety” “silky” という布地に喩える形容詞や(13)の“punchy” という動作を含む形容詞が見られた¹⁾。更に形容詞にとどまらず、(11)では“soften”という動詞、(14)では“has the plush texture”という句の形で香りを表している。

- (8) Harsh. A crude, unbalanced, rough pungent odour. (perfumersworld)
- (9) Velvety. A soft, smooth, mellow fragrance without harsh chemical notes. (Ibid.)
- (10) sticky vanilla in the base. (Irvine, p. 85)
- (11) A summer scent with an excellently balanced top note of sharp lemon sherbet softened by melon with a tinge of orange blossom and the coolness of rosewood. (Ibid., p. 76)
- (12) almost silky rosewood and cool cedar. (Ibid., p. 88)
- (13) punchy herbaceous green notes (Ibid., p. 85)
- (14) It has the plush texture of dusky cabbage roses ... (Ibid., p. 57)

「触覚」から「嗅覚」への比喩はまさに生きた比喩として多様に表現される。「触覚」の領域の語には限定する語を加えたり、形容詞、名詞、動詞、句と形も自由に用いられる。新鮮な触感を呼び起こすことにより、香りの微妙な質も生き生きと伝えられている。

“sharp”という語も以下の例(15)–(17)のように、さまざまに形を変えて用いられる。(15)では“razor”という語を加えることにより、香りを鼻に吸い込んだ時の刺激の鋭さが生々しく伝えられる。(16)ではその鋭さが“edge”という明確な形を得る。またその鋭さは変化する。(17)の“sharpen”や(15)の“round”といった動詞はその変化を表している。

- (15) Sicilian lemons come tumbling out of the bottle golden and razor-sharp eventually rounded by a little grapefruit. (Irvine, p. 70)
- (16) If a blend seems to have too many sharp edges, try adding some rose. (Aftel, p. 154)
- (17) Narcotic orange flower sharpened with green rose and jasmine ... (Irvine, p. 53)

(18)でアルデヒドの匂いは“angularity”という名詞により鋭い形を得て、それが“pierce”という動詞が示すように香り全体に変化を与えている。(19)の“prick”、(20)の“puncture”という動詞は新たに登場してくる香りの鋭さを示している。

- (18) Suave top note pierced by the angularity of aldehydes. (Irvine, p. 106)
- (19) The overall cuddly effect of all these edibles with demure flowers is pricked by an intriguing peppery backnote. (Ibid., p. 81)
- (20) The fruity green top note is punctured by hot pepper and cool cardamon. (Ibid., p. 112)

匂いには「乾湿さ」も感じられる。(21)の“dry”、(22)の“damp”がこれを示す。

(21) Vetiver: rich, dry, earthy and rough ... (Irvine, p. 19)

(22) Oakmoss: sea-like; creamy damp and very sensual. (*Ibid.*, p. 19)

匂いにはまた「温度」も感じられる。(20)、(23)-(26)の形容詞“hot”“cool”“chilly”“icy”“warm”、(27)(28)の名詞“heat”“warmth”、(28)の動詞“warm”は全て、本来は温度を表す語彙でありながら、比喩的に匂いの質とその変化を表している。

(23) Cool Herbaceous notes (perfumersworld)

(24) Thrillingly strict and chilly. (Irvine, p. 103)

(25) Icy freshness cedes to lathery cleanness ... (*Ibid.*, p. 89)

(26) Amber. A heavy full bodied powdery warm fragrance note. (perfumersworld)

(27) Civet: ... dropped in minute proportion into a floral bouquet, it metamorphoses, adding radiant heat and sexiness. (Irvine, p. 18)

(28) Soon warms into a more musky, chocolaty warmth sweetened with flowers. (*Ibid.*, p. 67)

「触覚」には「重さ」の感覚も含まれるが、これも匂いの質を表現するのに用いられる。(29)(30)の“light”、(30)(26)の“heavy”といった重さを表す基本的な語に加え、(31)(32)に見られるように、“featherweight”“airy”など軽さを強調した語も匂いの質を表現する²⁾。

(29) You might choose a light, energizing fragrance when you are setting off to work ... (Irvine, p. 8)

(30) Each family opens with the lightest, freshest version of the family, and gradually works through to the richest or heaviest version. (*Ibid.*, p. 12)

(31) A featherweight floriantal that quickly vanishes. (*Ibid.*, p. 18)

(32) Airy, soft and herbal with camomile mid-notes ... (*Ibid.*, p. 88)

以上の考察より、さまざまな種類の「触覚」の語彙が匂いの質を生き生きとした共感覚比喩で表すことが明らかになった。「触覚」から「嗅覚」という共感覚比喩は確かに生きていと言えらう。

4. 次元からの共感覚比喩

「次元」に関しては、一つの独立した感覚として扱わず、「視覚」という枠に「光」や「色」とともに含めてしまう研究が多い³⁾。しかし「次元」「光」「色」を表す語の共感覚比喩における用いられ方はそれぞれに大きく異なる。「次元」を表す語は他の多くの感覚経験を表すことができるが、「色」を表す語は他の感覚経験を表すのには用いられにくい。本稿でもそれぞれ別個に検討していくこととする。

「次元」の領域の語は実際に用いられる際、実は「触覚」での感覚を伝えていることが多い。前節で論じた「触覚」からの共感覚比喩の例でも、「次元」を表す語が登場していた。(15)の“round”、(16)の“have too many sharp edges”、(18)の“angularity”はどれも次元における物の形である「まるみ」や「突起」や「角」を示すことにより、その形の物に触れた時の触感を伝えていた。こうした表現は形式的には「次元」の領域の表現だが、上の例において共感覚比喩として働く際には、「触覚」の表現として機能していると考えられる。「次元」の語が「触覚」の感覚を伝え、更に共感覚比喩を通して「嗅覚」の経験を表現しているのである。

「触覚」につながらない「次元」の語彙が嗅覚経験を形容する例も見られる。次の(33)に含まれる“well-rounded”は「次元」の語彙としても、「触覚」の語彙としても機能していると感じられるが、続く“full”は「触覚」の意味合いは持ちにくく、単に「次元」の語彙である。

- (33) a fragrance that is well-rounded or full. (perfumersworld)

以下の(34)-(40)の例では「次元」の語彙が「触覚」を全く介さずに香りという嗅覚経験を表現している。“low” (34)、“flat” (35)、“deep” (36)、“thin” (37)、“thick” (38)、“sheer” (39)といった形容詞に加え、“depth” (37)といった名詞、“deepen” (40)という動詞も用いられている。

- (34) Solvents. Refers to materials that have a low odour (odourless?) in a perfume or materials that are added not for their smell but for other purposes. Anti-oxidants, colours, solubilisers. (perfumersworld)

- (35) Flat. Uninteresting, lacking in lift, diffusion or distinction. (Ibid.)

- (36) Rich florals: deeper than sweet florals ... (Ibid.)

- (37) Thin. When a perfume lacks complexity or depth. Lacking in body. (Ibid.)

- (38) A true oriental, dense and caressing as a fur coat, thick with the hypnotic odour of full-blown, dark red roses. (Irvine, p. 137)

- (39) Sheer, soft florals ... (Ibid., p. 34)

- (40) Sweet but fresh, then deepens into an ambery base accord that's very 1980s. (Ibid., p. 53)

香りが「次元」として捉えられるとはどういうことなのか、その一つの答えが次の文章(41)に見られる。“oudh”という香料を嗅いだルカ・トゥリンはその香りの“dimension”（次元、広がり）に驚く。広大、無限であり、豊かな香りの層が石切り場のように深く複雑に重なっていると感じるのである。この例は「次元」から「嗅覚」への共感覚比喩が感覚として生きていることを示している。

- (41) The *oudh* is unbelievable. Incredibly strong, first of all. ... But its vast dimension is what astonishes: a huge smell, spatially immense, and incredibly complex, a buttery layer as deep as a quarry ... (Burr, p. 286)

5. 動静からの共感覚比喩

「動き」を表す語彙も共感覚比喩により「嗅覚」の経験を表すことができる。香水の香りを説明する(42)-(46)の中の下線部はこれを示している。

- (42) Beautifully balanced; quiet. (Irvine, p. 71)
(43) The heart note is serene, undefinable flowers wrapped in soothing vetiver and woods. (*Ibid.*, p. 44)
(44) Sparkling, almost fizzy. (*Ibid.*, p. 109)
(45) Warm, vibrating amber base. (*Ibid.*, p. 129)
(46) It opens quite violently with a flood of lemony-orange bergamot But it's full of movement at this stage: already the patchouli and vetiver of the mid-note are complimenting the citrus ... (*Ibid.*, p. 139)

共感覚比喩の研究において、「動静」という感覚が一つの独立した感覚として扱われることは少ないが、(42)-(46)のような例は、共感覚比喩において「動静」という感覚が確かに存在し、機能していることを示している。

6. 味覚からの共感覚比喩

「味覚」と「嗅覚」の結びつきは強い。何かを食する時、この2つの感覚は同時に働いている。また、食べ物の味と匂いは一致することが多い。甘いクッキーを焼くと甘い匂いがたちこめるし、酢は嘗めても嗅いでも酸っぱい。その結びつきの強さゆえに、「味覚」の語彙が匂いを表す際には、それが比喩によるものなのか、換喩によるものなのかの区別が難しい。匂いだけを判断して「甘い」というのであれば、それは比喩だが、匂いからその発生源の物の味を「甘そう」と想像しているのなら、それは換喩となる。こうした比喩と換喩は、同時に起きていることも多いと思われる。

しかし、香水の香りを描写する場合、これは食べ物の匂いを描写する場合とは異なり、換喩的要素はかなり排除される。香水の香りを描写する場合の「味覚」から「嗅覚」への共感覚比喩の例を次に挙げる。(47)と(48)は甘味、(49)–(52)は酸味、(53)は甘味と苦味、(54)は塩辛さ、(55)はおいしさ、という味を表す語が香りを表現している。

- (47) *levo-citronello*, a molecule that occurs naturally in geraniums and has a warm, sweet, slightly green rosy scent ... (Burr, p. 71)
- (48) *57 for Her* is a sad little thing, an incongruous dried-prunes note with a metallic edge that manages the rare feat of being at once cloying and harsh. (Ibid., p. 40)
- (49) there's a slightly sour green whiff as it dies ... (Irvine, p. 47)
- (50) Acid, mint, then soapy. (Ibid., p. 105)
- (51) acidulous and resinous fresh notes (Ibid., p. 115)
- (52) Tart, fizzy fruit opener, with detectable kumquat—an original fruit note. (Ibid., p. 67)
- (53) the bittersweet smell of sawdust. (Ibid., p. 127)
- (54) Here, it is kept fluent and fresh by salty Montauk rose, androgynous cedar and the citrus notes. (Ibid., p. 136)
- (55) Deliciously different, and not for everyone, *Jungle* is a hot posset of warm spices and mango. (Ibid., p. 85)

(47)の甘い香りはゼラニウムという花の香り、(53)の苦くて甘い香りはおがくずの匂い、(54)の塩辛い匂いはモントーク産のバラの香りであり、食べ物の匂いではないので、本当の味としての甘さや塩辛さとの換喩的つながりは存在しない。また、(53)の苦さや(54)の塩辛さは、食べ物においても換喩的つながりは存在しがたい。食して苦いもの、塩辛いものも、鼻を近付けただけではその味は分からない。(53)の苦くて甘い香りや(54)の塩辛い匂いは、香りを嗅いだ際に共感覚により引き起こされた味の感覚を伝えていると判断される。

香水の香りを描写する「味覚」から「嗅覚」への共感覚比喩表現は、「味覚」から「嗅覚」への共感覚比喩が換喩を介さずとも存在することを示している。

7. 光からの共感覚比喩

「光」、つまり明暗を表す語は色彩語彙とは異なり、多くの種類の感覚経験を表現することができる。明るさ、暗さ、透明さを表す光に関する語彙は、匂いという嗅覚経験も表す。もっとも日常的には、「明るい香り」「暗い匂い」と言うことは少なく、「澄んだ香り」という表現を用いるくらいだが、香水の描写では香りを表すために多用される。

(56)の“bright”、(57)の“luminous”、(58)の“radiant”は明るさを、(59)の“darkness”は暗さを表す語彙でありながら、香りの質を伝えている。(58)の“limpid”、(60)の“translucent”、(61)の“transparency”は透明さを表す語彙で、これも香り表現している。

- (56) A double dose of bergamot and lemon gives a bright feel to the top note of freesia and honeysuckle with a hint of plum. (Irvine, p. 137)
- (57) First is a luminous floral ... (Ibid., p. 29)
- (58) Radiant orange blends with limpid roses. (Ibid., p. 72)
- (59) The base is quite woody but with an animal darkness. (Ibid., p. 130)
- (60) a light translucent jasmine ... (Ibid., p. 103)
- (61) the transparency of an aqueous note ... (Ibid., p. 128)

明るさ、透明さは(62)(63)において、“crystal”という語が結びつくことにより具体性を持ち、生き生きとした共感覚比喩として香り描写している。

- (62) the crystal radiance of aldehydes. (Irvine, p. 51)
- (63) lemony, crystal-clear rose, with a geranium note. (Ibid., p. 18)

透明さについての「視覚」から「嗅覚」への共感覚比喩表現は(64)では、“clear”という動詞の形で現れる。一般的用法ではないので原文の筆者もイタリック体を用い、“like”以下で説明を加えているが、このように新しい表現を自由に作れるということは、透明さという「視覚」から「嗅覚」への共感覚比喩が生きたものであることを証明している。

- (64) Vertelon clears a perfume, like when you pour paraffin oil on an opaque sheet of paper and watch as the paper becomes translucent. (Burr, p. 13)

8. 色覚からの共感覚比喩

「色覚」(多くの研究では「視覚」に「次元」や「光」を表す語とともにまとめて扱われる)から「嗅覚」への共感覚比喩は、過去の研究では筆者の知る限り認められていない。ところが香水の世界を覗いてみると、色彩語彙も香りの形容に用いられている。しかし、それぞれの例を分析すると、やはり「色覚」から「嗅覚」という共感覚比喩は簡単に成立するものでないことが明らかになるのである。

まず、香水の香りの描写に用いられる色彩語彙の種類には大きな偏りがあり、“golden”と“green”の2語が頻繁に登場する。“golden”の例を次の(65)(66)に挙げた。

(65) Dry golden base.

(Irvine, p. 115)

(66) (= (15)) Sicilian lemons come tumbling out of the bottle golden and razor-sharp eventually rounded by a little grapefruit.

“golden”という語は色彩語彙としては特殊で、光と強く結びついており、「光輝く」という意味で用いられる。上の例でも、明るさを表す“golden”が「光」感覚から「嗅覚」への共感覚比喩を表している可能性がある。

次の例(67)で香水の中に感じられる花の香りは、“pastel-soft”と形容されるが、“pastel”の意味は「淡い色調」で、特定の色を表すものではなく、これも光と結びついたことばである。また(68)の“black”も光がない暗い状態を表すということから、光に結びつくことばと言える。(65)-(68)の表現は全て、「色覚」から「嗅覚」というより、「光」から「嗅覚」という関係の共感覚比喩である可能性が高い。

(67) The flowers in the mid-note are pastel-soft, partly due to the effect of melon.

(Irvine, p. 80)

(68) *Shalimar* by Guerlain, lovely, with a marvelous little black *sillage*, the trail of perfume you leave behind you ...

(Burr, p. 296)

他の色彩語彙も香水の香りを表すのに用いられるが、この場合は共感覚比喩だけでなく、換喩や概念メタファーの助けを得ていると思われる。先にも触れたように、“green”という語は香水の香りの描写に頻繁に登場するが、そこには換喩が介在する。(69)の香水の用語解説で“green”は、「新鮮な刈られた草や葉のにおい」と記述され、実際の香水の香りの説明でも(70)のように用いられている。“green”という語は匂いを直接形容するというより、匂いから思い起こさせられる物、風景の色を指している。色→風景→風景に伴う匂い→香水の匂い、という連想を読者に求める表現となっている。

(69) Green. The odour of fresh cut grass, leaves. ...

(perfumersworld)

(70) A beautifully composed floral with a true green top note that smells like freshly cut, wet grass.

(Irvine, p.23)

(71)では上の“green”という語に、“dark”という光と結びつく語が重なっている。換喩と、「光」感覚から「嗅覚」への共感覚が融合した表現と考えられる。

(71) The base is cool, woody and dark green with a chypre timbre.

(Irvine, p. 71)

(72)-(74)に現れる色彩語彙、“white” “pink” “bronzy” は、その前後の文章、コンテキストに支えられてはじめて香りを表現することが可能となっている。

(72) As soon as the initial fog dissipates, a splendid form appears, all of one piece, smooth and seamless, a strong white note, powdery and sculptural ... *Chamade* is nevertheless a haughty perfume, pure and distant and miles away from the slightly catty chic of *Jicky* and *Shalimar*. (Burr, p. 120)

(73) Intensely sweet and flagrantly sensual. It smells pink. ...

Elsa Schiaparelli, the surrealist fashion designer, wrote: ‘The colour flashed in front of my eyes. Bright, impossible, impudent ... a colour, pure and undiluted. So I called the perfume *Shocking*.’ The colour, used for the box, is known to this day as shocking pink. (Irvine, p. 119)

(74) ‘Bizarre deity, brown as the night/Your perfume mingles musk and havana’ wrote Baudelaire. He would have liked *Shalimar*, the most oriental of perfumes. It smells like an Arab sheik, bronze in timbre, resonating with warmth, and reeking of sensuality. ... the suave, spicy balsams — it’s this which gives the bronzy feeling. (*Ibid.*, p. 139)

(72)で、香りは滑らかさと一体感、純粋さなどを感じさせる。これは白い大理石の彫像のイメージに重なる。純粋さも大理石も“white”（白）のイメージで一致する。大理石の彫像に関する知識と香りを嗅いだ時のイメージが融合して、“white note”という表現が成立している。

(73)では香水がピンクの匂いがするというのだが、「ピンクの匂いがする」という表現は一般にはしないから、“It smells pink.”と“smell”がイタリック体になっている。なぜ匂いを嗅いでピンク（ショッキングピンクと後で限定される）の色が思い浮かんだのかという疑問に対しては、香水の香りの描写とこの香水を嗅いだ人物がショッキングピンクに対して抱いているイメージの説明が手がかりをくれている。“intensely sweet and flagrantly sensual”という香水の香りの描写はショッキングピンクの“bright, impossible, impudent”というイメージとかなり一致する。香水の香りとショッキングピンクの色はこのイメージの一致を介してつながっている。この文章を読む者も、このイメージの一致を伝えられることではじめて「ピンクの匂い」を理解できる。ここで「イメージ」としたものには、共感覚により想起された感覚やそれぞれの語彙についての知識などが関わりと考えられるが、今後更に明確にしていく必要があるだろう。

(74)では肌の色も、声も、香りもブロンズ色にまとめられている。この例で示されるブロンズ色のイメージはぬくもりと官能性である。「色覚」から「触覚」、「聴覚」から「触覚」、「嗅覚」から「触覚」の感覚が、共感覚により引き起こされ、この3種の共感覚が温もりという「触

覚」の感覚で統一されたと考えられる。

以上の考察により、「色覚」から「嗅覚」への直接の共感覚比喩は単独では成り立ちにくく、他の共感覚や、共感覚以外の比喩、換喩等が組み込まれることによって成立していることが明らかになった。

9. 聴覚からの共感覚比喩

「聴覚」から「嗅覚」という共感覚比喩も、過去の研究では筆者の知る限り存在が認められていない。しかし香水の香りの描写には「聴覚」の表現が頻繁に用いられる。

香水の世界では、「香りは音楽だ」あるいは「香水は楽曲だ」という概念メタファーが確立されており、この構造的な概念メタファーが、「聴覚」から「嗅覚」への共感覚比喩表現を多く生み出している。“note” “accord” という語は、香水の香りを表すための基本的な語彙だが、(75)(76)の香水についての用語解説に見られるように、どちらも意識的に音楽の世界から借用した表現である。

(75) Note. Borrowed from the language of music to indicate an olfactory impression of a single smell, or to indicate three distinct periods in the evaporation of a perfume — top note, middle note, bottom note. (perfumersworld)

(76) Accord. An accord is the perfumery equivalent of a Chord in music. ... It particularly applies to where each component material is in balance and harmony with each other material so that one no single component can be detected. (Ibid.)

“note” と “accord” の語は下の(77)で実際の香水の説明に用いられているのだが、“accord” の前に “melodious” がつくことから、音楽から香りへの比喩が生きた比喩だと分かる。

(77) citrus top notes melting into a melodious accord of natural flowers with dense, velvety orris and sensuous animal notes. (Irvine, p. 135)

香りは、(78)(79)のように他の聴覚の名詞でも表現される。

(78) a chypre timbre (Irvine, p. 71)

(79) A scent with a stonking big beat. You can easily miss the fruity note as the carnal roar of jasmine and sandalwood in heat tear through your olfactory nerve. The heavy bass comes from a megadose of Mysore sandalwood ...

(Ibid., p. 135)

音の高低も香りへと転用される。

- (80) Tingling medicine-cabinet high note ... (Irvine, p.123)
(81) One of those scents of such high-pitched sweetness you feel it could shatter crystal.
Perhaps appropriately, considering Marie-Lalique envisaged it as 'un parfum de cristal'. (Ibid., p. 64)
(82) the huskiness of some spice (Ibid., p. 66)
(83) The theme is continued on a more profound key by benzoin and sandalwood, played against warm vanilla. (Ibid., p. 140)

「音を出す」という意味を含む動詞は香りが漂い出るのを表す。

- (84) The harsh, demonic note continues to sound ... (Irvine, p. 131)
(85) Calèche, resonates quietly. (Ibid., p. 106)
(86) An insolent green note opens then echoes through slowly evolving siren notes of civet and amber ... (Ibid., p. 140)
(87) First, bergamot plays sharply against orange flower ... (Ibid., p. 58)
(88) this is a disarmingly simple harmony of a few ingredients that sing together. (Ibid., p. 39)
(89) A fragrance that does not shout. (Aftel, p. 132)

香料は奏でられる楽器としても表現される。

- (90) The fruit notes are lightly played, never sharp, the flowers hushed in the midst of all this plush. (Irvine, p. 140)

香料と香料、香りと香りは組み合わせることで、調和し (“harmonize” (91))、オーケストラ用の曲 (“orchestration” (92)) とも、オペラの序曲 (“overture” (93)) ともなる。

- (91) Outrageous aroma of black pepper soon harmonizes audaciously with unbelievably strong clove carnation. (Irvine, p. 133)
(92) The orchestration of its base notes. (Ibid., p. 139)
(93) Melony overture ... (Ibid., p. 80)

以上見てきたように、香水の香りの描写には多様な「聴覚」の表現が用いられる。こうした

表現が可能なのは、本節のはじめに述べたように、香水の世界で、「香りは音楽だ」「香水は楽曲だ」というメタファーが確立されていることも大きいと考えられる。音楽への比喩は(94)のように明示されることも多い。この例では香水の変化していく香りが、音楽のシンフォニーの展開のようだと語られ、香りの組み立てが作曲にも対比させられ、香水と楽曲の構造的対応が見られる。

- (94) A well-constructed fragrance has harmony and smoothness. Top notes blend into heart notes, which, in turn, blend into base notes, as they would in a musical symphony. (Irvine, p. 16)

ただし、構造的対応は、「聴覚」から「嗅覚」への共感覚比喩表現に必ず必要な物とも言えない。次に挙げる(95)(96)も香りを音楽に喩えていることが明示されるが、ここでは構造的対比ではなく感覚そのものが香りと音楽を結ぶ重要な鍵となっている。(95)ではある匂いが「オーケストラにおけるトロンボーン」に喩えられるが、それは、匂いが与える印象とトロンボーンの音を与える印象の一致による。匂いも音も「触覚」の“edge”と「光」の感覚“rich bloom”（豊かな輝き）を与える。「嗅覚」経験から共感覚により引き起こされる「触覚」と「光」感覚とが、「聴覚」経験から共感覚により引き起こされる「触覚」と「光」感覚に一致するのである。(96)では香りが音そのものに喩えられるが、ここでも「嗅覚」経験から共感覚により引き起こされる「光」感覚“bright”と「触覚」“dryness”とが、「聴覚」経験から共感覚により引き起こされる「光」感覚と「触覚」に一致している。「嗅覚」と「聴覚」は直接共感覚で結びつくのではなく、それぞれにおいて引き起こされる共感覚によって、間接的に結びついているのである。

- (95) The odor is a shimmering mixture of sweat and tropical fruit, with a ‘green’ marijuana-like note. Used in perfumery much as trombones in the orchestra, imparting an edge and rich bloom to virtually any composition. (Burr, p. 12)
- (96) one of the olfactory features of molecules containing a cyclic ether bridge ... is a bright dryness equivalent to a musical ‘sharp.’ (Ibid., p. 207)

以上の考察により、「聴覚」から「嗅覚」という共感覚比喩表現は可能だが、「聴覚」から「嗅覚」への直接的な共感覚比喩は成立しにくいということが明らかになった。構造的な概念メタファーや他の感覚との共感覚を介してはじめて、「聴覚」から「嗅覚」という共感覚比喩表現が成立するのである。

10. おわりに

香水の世界は比喩にあふれている。共感覚比喩表現も他では見られない豊富さで、豊かに香りを表している。目に見えず、捕らえどころのなかった香りが、比喩ということばを得て具体性を持ち、語り伝えられるようになる。

過去の研究で、「嗅覚」の経験を共感覚比喩により表現できる他の感覚は、「味覚」(Williams)と「触覚」(山梨)、あるいは加えて、「次元」「動静」(山田 (2001))とされてきた。しかし今回これに「光」の感覚も加わることとなった。「触覚」「味覚」「次元」「動静」「光」という5つの感覚を表すことばは、生き生きとした共感覚比喩で香りを描写し、これを読む者に香りを感じさせる。この共感覚比喩の方向性は冒頭に挙げた図(7)の感覚の位置関係に一致する。

「色覚」と「聴覚」のことばも香りを伝えるために用いられ、形としては、「色覚」「聴覚」から「嗅覚」へという共感覚比喩表現が存在する。だがその文脈を見ると、「色覚」「聴覚」から「嗅覚」という共感覚だけで成立してはいない。構造的な概念メタファーや換喩や複数の共感覚比喩の重なりなど、他の要素が働いているのである。「色覚」「聴覚」から「嗅覚」へという共感覚比喩は感覚として存在するのも知れないが、その結びつきは他の感覚にくらべ極めて弱いと考えられる。

尾注

1. 各例においては、議論の上で重要となる箇所の下線を施している。
2. ただしここでの“featherweight”は香りの「軽さ」だけでなく、続く“vaniish”が示す香りの消え方が早いことも同時に表現している。
3. 山梨 (1988) などがこれにあたる。

参考文献

- Burr, Chandler (2002) *The Emperor of Scent: A True Story of Perfume and Obsession*, Random House Trade Paperbacks.
- Süskind, Patrick (1985) *Die Geschichte Eines Mörders*, Diogenes Verlag Ag Zürich. (池内 紀 訳 (2003)『香水—ある人殺しの物語』(文藝春秋))
- 荘司 菊雄 (2001)『においのはなし—アロマセラピー・精油・健康を科学する』技報堂出版株式会社
- Ullmann, Stephen (1959) *The Principles of Semantics*. Blackwell. (山口 秀夫 訳 (1964)『意味論』紀伊國屋書店)
- Williams, J. M. (1976) “Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change,” *Language*, 52, 461-478
- 山田 仁子 (1992) “More than Five—共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚—”『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』3巻, 75-83

山田 仁子 (1993) “一言語は感覚の内視鏡—共感覚比喻に基づいた形容表現の分析,”

HYPERION vol. 40, 29-40

山田 仁子 (1994) “More than Five II —共感覚が浮き彫りにする感覚 (英語の場合)—,”

『言語文科研究』徳島大学総合科学部 1巻, 113-134

山田 仁子 (2001) (口頭発表) 「共感覚比喻が示す“感覚”」関西認知言語学研究会

山梨 正明 (1988) 『比喻と理解』東京大学出版会

例文の出典

Aftel, Mandy (2001) *Essence and Alchemy: A Book of Perfume*. North Point Press.

Irvine, Susan (2000) *The Perfume Guide*. Haldane Mason.

<http://www.perfumersworld.com/glossary/>